

■言語文化専攻博士後期課程授業科目名・講義等の概要

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
言語文化研究特別演習Ⅰ－(1) (日本語教育学)	川口 良	オムニバス形式により、同一授業を2名の教員が担当する。本演習は実践研究に繋げるために、理論研究部分を担う。現代は、かつてないほど大量の「日本語バリエーション」が生み出されている。日本に長期滞在する日本語非母語話者の数が大幅に増加している現在、非母語話者が会話の現場でバリエーションをめぐるさまざまな日本語問題に直面することは想像に難くない。本演習では、日本語教育が日本語のバリエーションと取り組んでいくためには何が必要なのかという視点から、種々の研究課題を設定する。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(2) (日本語教育学)	川口 良	オムニバス形式により、同一授業を2名の教員が担当する。本演習は実践研究に繋げるために、理論研究部分を担う。「言語の動態」として「日本語のバリエーション」を捉える視点から、日本語教育と種々の言語変種（地域方言、社会方言、スタイルなど）や言語変異（ラ抜きことばなど）の関係について、掘り下げて検討する。これまでは、日本語母語話者間のネイティブ場面におけるバリエーションが注目されることが多かったが、接触場面における母語話者のバリエーション（フォリナートーク）や非母語話者間のバリエーションに注目し、日本語教育の取り組むべき課題を明らかにしていく。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(3) (日本語教育学)	川口 良	オムニバス形式により、同一授業を2名の教員が担当する。本演習は実践研究に繋げるために理論部分を担う。人間は社会化していく過程で、場面に応じた言語変種を使い分ける社会言語能力、多変種能力（バリエーション能力）を身に付けていく。日本語非母語話者はさまざまな場面で日本語バリエーションのインプットを受けつつ、どのような過程を経てどのようなバリエーション能力を習得していくのだろうか。言語使用者のバリエーション能力を解明することによって、日本語教育と日本語のバリエーションをめぐる問題を総合的に解き明かしていく。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(1) (日本語教育学)	加納 陸人	本演習はオムニバス形式により、同一授業を2名の教員で担当する。受講者が多面的な視点で研究が深められるように理論研究と実践研究を連動させる。本演習は実践研究部分を担う。 ポスト教授法が叫ばれて久しいが、現在、日本語教育は多様化しており、従来の教授法や理論では対応できなくなってきた。教師の役割も「教える」ことから学習者の自律的な「学び」を支援する役割に変化してきた。このような状況の中で、教育現場でどのような教室活動を取り入れ、実践していったらいいか、教授法のあるべき姿を考える。そのためには、第二言語習得論やことばと文化の統合など、多面的な視点を取り入れたい。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(2) (日本語教育学)	加納 陸人	本演習はオムニバス形式により、同一授業を2名の教員が担当する。受講者が多面的な視点で研究が深められるように理論研究と実践研究を連動させる。本演習は実践研究部分を担う。近年、海外において日本語教育のシラバスの改訂や教育に関する考え方が大きく変化し、知識中心からコミュニケーション中心へのパラダイムシフトが見られるようになってきた。海外における、とりわけ日本語教育が盛んな中国や韓国を中心に、日本語教育の実情を踏まえ、教育現場で抱えている問題点や教授法を洗い出し、学習者や地域社会の立場に立ち、どのような教育方法が適切か、将来の日本語教育の方途を考え構築していく。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(3) (日本語教育学)	加納 陸人	オムニバス形式により、同一授業を2名の教員が担当する。本演習は実践部分を担う。多文化共生における日本語教育として、日本語教育指導者としての資質や能力を身に着けることが急務であるとする。本演習では日本語教育実践者が目指すべき資質や能力について扱う。 21世紀は「解のない社会」といわれているが、このような社会にあって、日本語教育の卒面において何が大切であるのかについて触れる。近年、21世紀に欠かせない資質や能力として、「キー・コンピテンシー」や「21世紀型スキル」が挙げられるが、それらを日本語教育の実践面でどのように取り入れ、日本語教育の現場を構築させていくかを考える。さらに、それを具現化した教科書や評価法についても扱う。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(1) (日中対照研究)	蔣 垂東	『鶴林玉露』（1252）から『東語入門』（1895）まで中国の古文書に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の資料を対象に、日中間の語文交渉史および音韻史におけるこれらの資料の重要性について探求する。一年目は、日中両国の交流史に立脚して、各時代の日本語を記録した資料についてそれぞれの時代背景、および伝存状況を中心に考察を進める。 論文指導では、発表を通して、研究テーマを明確にしつつ、文献・データの収集・調査・扱い方、そして先行研究の掌握などの基礎能力を高め、資料を徹底的に読み込む研究手法を身につけさせる。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
言語文化研究特別演習Ⅰ－(2) (日中対照研究)	蔣 垂東	13世紀から19世紀までの中国の古文献に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の資料を対象に、日中間の語文交渉史および音韻史におけるこれらの資料の重要性についての探求を深める。二年目は、漢語方言と音韻史に立脚して、各時代の資料における日本語の表音に用いられた音訳漢字の用法を中心に考察を進める。論文指導では、本格的にテーマの研究に取り組み、口頭と発表などの形で成果を研究会や学会の場で段階的に発表できるよう、助言・指導する。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(3) (日中対照研究)	蔣 垂東	13世紀の『鶴林玉露』から19世紀の『東語入門』までの中国の古代文献に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の資料を対象に、日中間の語文交渉史および音韻史におけるこれらの資料の重要性についての探求を深める。三年目は、これまでの検討で明らかになった音訳漢字の用法を踏まえ、音訳漢字に反映されたそれぞれの方言のその当時の実態について考察した上、その方言の現代までの変遷の解明を目指す。論文指導では、学会発表や雑誌論文と並行して学位論文の作成について助言、指導を行う。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(1) (第二言語習得研究)	秋山 朝康	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅰ－(2) (第二言語習得研究)	秋山 朝康	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅰ－(3) (第二言語習得研究)	秋山 朝康	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅰ－(1) (日本語学)	鬼山 信行	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅰ－(2) (日本語学)	鬼山 信行	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅰ－(3) (日本語学)	鬼山 信行	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (日本近代文学)	鈴木 健司	近代文学の分野における学位論文の指導をおこなう。指導の実際にあっては、1年次では、論文の全体の構想、研究の特色、意義を明確にさせ、演習形式で発表させることにより、質の向上を促す。宮沢賢治を例に挙げるなら、童話、詩の両ジャンルを横断する特質をふまえ、かつ、それぞれの表現・思想の豊かさに気付かせる。そのためには、先行研究の調査はもとより、化学・地学・物理学・音楽・心理学・民俗学・宗教学など、常識的な文学の領域を越境する知識に関しても、積極的に取り組む姿勢を学ばせる。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (日本近代文学)	鈴木 健司	近代文学の分野における学位論文の指導をおこなう。指導の実際にあっては、2年次では、学生自身が主張する研究内容のオリジナル性と研究的価値を考えさせ、博士論文の素材と成り得るか否かの検証を行う。演習形式の授業で定期的な発表を義務づけ、発表内容を文章化し提出させることにより、博士論文の前段階となるレベルの訓練を繰り返す。学内での口頭発表や、共同研究などにも積極的に参加をさせ、経験を積み重ねさせることも重要である。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (日本近代文学)	鈴木 健司	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (中国文学)	白井 啓介	19世紀から20世紀にかけての中国現代文藝の中、上演藝術としての話劇(台詞劇)及び映画の歴史、その作家・作品、表現流派を取り扱う。初年度は、春学期には(A)修士課程での研究成果の吟味から着手し(1-4回)、(B)追究する対象を多面的に検討(5-8回)、(C)先行研究、定説を系統的に整理し(9-12回)、(D)新たに研究する余地を洗い出す(13-15回)。秋学期には、有効な方法を探るべく、(E)日中欧各研究状況を参照しつつ検討する(16-19回)。その上で、(F)実作品の読み込み、作品分析を進め(20-25回)、(G)ここから発見し得た知見を小論にまとめる作業に入る(26-30回)。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (中国文学)	白井 啓介	次年度では、初年度の成果を踏まえ、(A)研究者自身の独自の読み、発見を付け加えるべく多角的な視点を探る(1-4回)。次に、(B)近縁、隣接作家や作品、流派との比較衡量を行いつつ、さらなる閲読、作品検証を深める(5-11回)。(C)ここから得た知見を小論にまとめる(12-15回)。(D)執筆の過程で進めた思索に基づき構想を拡張し(16-19回)、(E)補強すべき論点を諸家の研究成果に求める(20-24回)。こうして得た新たな段階の知見を、(F)同時代性の中に位置付けるため歴史研究の成果と照合し(25-27回)、(G)疑問とその解明を反復させつつ独自の見解構築に導く(28-30回)。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (中国文学)	白井 啓介	2018年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (比較文化)	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族の間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。本演習では、中国大陸を含む東アジア諸地域を対象とした文化人類学的著作の読解を中心に、文化人類学の理論と手法を修得する。論文指導では、文献・データの収集・調査・扱い方、先行研究の掌握、フィールド調査の方法など、研究を深めていくための基礎能力を高め、資料解釈・分析の手法を身につけさせる。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (比較文化)	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族の間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。本演習では、中国大陸東南部を対象とした文化人類学的著作の読解を中心に、文化人類学の理論と手法を用いて個別の特定民族の社会文化状況について分析し、アイデンティティや民族文化の特質を比較検討する。論文指導では、先行研究の批判的検討、フィールド調査の資料分析などを通じて、学位論文作成に向けた基礎固めを行う。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (比較文化)	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族の間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。本演習では中国大陸西南部を対象とした文化人類学的著作の読解を中心に、文化人類学の理論と手法を用いて個別の特定民族の宗教信仰や世界観について分析し、「民族」としてのアイデンティティや民族文化を動的に把握する。論文指導では、研究論文の発表や執筆を目標に研究内容を深めさせつつ、学位論文作成に向けた指導を行う。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (日本古典文学)	紙 宏行	授業担当者の専門の中でも、近年特に研究対象としている、顕昭著『袖中抄』を取りあげる。同書は顕昭の難義語注釈書であるが、多様な分野の文献を引用、歌人らの談話を駆使して実証的に注釈作業を進めたものである。これを読み解いて、平安末期の和歌史の諸問題について考察したい。合わせて、和歌研究、古典文学研究の現状と課題について考えていきたい。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (日本古典文学)	紙 宏行	顕昭著『袖中抄』は、歌学書ではあるが、物語や説話にも言及するところが多く、特に、物語・説話の発生については、顕昭なりの論点を持っていたようである。ここから物語・説話研究にも視野を延ばし、ジャンルを横断する研究を試みてみたい。古典文学研究の現状をふまえ、新しい視点と方法論を身につけたい。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (日本古典文学)	紙 宏行	受講者が博士論文を完成させるため、古典文学研究の現状と問題点について多角的に考察してゆく。具体的な作品を取りあげながら、やや隘路にある古典文学研究の現状を把握する。また、授業担当者のこれまでの問題意識の変遷と研究のありかたについて紹介し、受講者の論文作成に資するような方向性を示してみたい。
言語学特殊研究Ⅰ		2018年度非開講
言語学特殊研究Ⅱ		2018年度非開講
日本語教育学特殊研究Ⅰ	川口 良	本講義では、コミュニケーションにおける発話の目的やそのやり取りの諸相にアプローチするための立脚点として、語用論の諸理論について学ぶ。話し手と聞き手のやりとりに代表されるコミュニケーションにおいて、人間は、対人関係の維持やコミュニケーション上の効率などを考慮しながら、その都度判断し、言語形式を選択している。そこに働く判断が語用論的原理と言える。「個別言語を超えて人間として共通に働く語用論的原理」とはどのようなものか、語用論で明らかにされてきた理論を通して把握する。
日本語教育学特殊研究Ⅱ	加納 陸人	多文化共生と人間関係づくりをめざした総合的な日本語教育を考えていく。そのためには、教科書、教授法、教師の役割について、いかに有機的に結びつけていかを取り上げ、日本語の教育目的や理念に反映させるにはどうしたらいいか、教科書作成の視点や技術面について扱う。また、教科書を実際にどのように使用するか、そのためのあるべき教授法の姿を考える。さらに、教師の役割として、多文化社会に生きる学習者の資質をどのように育成するかについても取り上げる。また、すでに上記のことが実践されている中国大連市の具体的な事例も交え、多文化共生社会と人間関係づくりに必要な能力である「キー・コンピテンシー」についても触れる。

指導的な役割を果たせる日本語教師になるために

私は日本語非母語話者の日本語接触場面における言語調節について研究しています。日本語教師になるために、2010年に文教大学言語文化研究科に進学しました。修士課程終了後、中国へ帰り、大学の日本語教員になりました。研究に深く取り組みたいと思い、2016年に博士後期課程に進学しました。将来、指導的な役割を果たせる日本語教員になりたいです。

言語文化研究科では、指導教官のみならず、他の先生方にも熱心なご指導いただけます。そして、他の院生と相互に助け合いながら楽しく有意義な研究生活が送れると思います。日本語教員を目指すなら、ぜひここへ来てください!



言語文化研究科 言語文化専攻博士後期課程3年
陳新さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
第二言語習得特殊研究Ⅰ	秋山 朝康	応用言語学の先行研究を概観し、基礎的知識の習得を目指します。主なテーマは言語テスト、動機づけ、タスクを扱います。文献を基に、受講生の発表と講師の講義を交えて授業を進めていきます。分担箇所については、内容をまとめたレジュメの作成および概要を発表し、その後、議論していきます。第二言語習得に関して、先行研究を基にこれまでの研究成果を概観するとともに、今後の研究テーマの可能性を探ります。
第二言語習得特殊研究Ⅱ	秋山 朝康	第二言語習得特殊研究Ⅰで学んだことを基盤に、さらに第二言語習得(英語教育)について検討します。第二言語習得のエキスパートになるために先行研究を基にこれまでの研究成果を概観するとともに、今後の研究の可能性を探ります。そして各自興味のあるテーマを決め、小規模な実証的研究を実施し、レポートにまとめ、発表してもらう予定です。小規模研究で経験したことを自分の研究に生かしてほしいです。
日中言語対照比較特殊研究Ⅰ	蔣 垂東	現代中国語の共通語に至るまでの変遷や漢語諸方言の違いの解明にとつてのみならず、万葉仮名(音仮名)をはじめ日本、ベトナム、朝鮮半島などの漢字音の理解、研究にとつても極めて重要である中国語の音韻史、特に6世紀頃から10世紀頃までの中古音を対象に、『広韻』と『韻鏡』という中古音を反映する最も重要な基礎資料を通して、中古音のシステムについての考察を行いつつ、中古音を駆使した万葉仮名(音仮名)の解読法を例に古代日中音韻史の対照比較について探求する。
日中言語対照比較特殊研究Ⅱ	蔣 垂東	字母、韻損、声調の順に中古音から現代中国語共通語および主要漢語方言への変遷を辿りつつ、中国語音韻史の諸問題について考えると同時に、日本漢字音との対照比較を行う。現代語への変遷においては、中国語の音韻変化の歴史、要因などについて考察し、日本漢字音との対照においては様々な視点から日中間の言語接触および日本語における中国語音受容の在り方についての探求を行う。
言語文化実地研究	—	本学の海外研修プログラムに参加した場合や、本研究科と協定を結ぶ外国の大学院で学修した場合に、その成果を単位認定する。
日本語言語文化特殊研究Ⅰ	紙 宏行	2018年度非開講
日本語言語文化特殊研究Ⅱ	鬼山 信行	従属節とモダリティ・時制の関係を考えていく。従属節は南不二男の体系を基礎に置いて、その後の研究に目を配る。モダリティと時制は主に従属節と関係がある部分を見ていくが、モダリティ一般、時制一般についての提言も行う。
日本語言語文化特殊研究Ⅲ	鈴木 健司	宮沢賢治の詩を取り上げる。教材は『春と修羅』第一集。賢治の詩は難解極まりないものであるが、受講学生には積極的に意見発表してもらい、賢治の詩の魅力を少しでも実感できるようにさせたい。『春と修羅』第一集全体を扱うことは時間的に不可能なので、「オホーツク挽歌」群とよばれる、妹としの死に関わる一連の挽歌群に焦点をあて、賢治の宗教観・宇宙観を読み解く作業を行う。宮沢賢治という詩人の壮絶な詩的営為の一端に触れられたらと考えている。
日本語言語文化特殊研究Ⅳ	鈴木 健司	宮沢賢治の童話を取り上げる。教材は「銀河鉄道の夜」。「銀河鉄道の夜」は賢治の代表作といわれると同時に、もっとも難解とされる作品である。第四次稿までの複雑なテキストをもつ本作品を、草稿状態から確認しつつ、宮沢賢治という作家が、童話というジャンルに込めた繊細かつ壮大な思想を、受講学生の積極的な参加を前提に、読み解いていきたい。天文学や宇宙物理学、宗教学の知識が必要になるので、前もって基本的な知識を獲得しておいてほしい。
英米言語文化特殊研究		2018年度非開講

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
中国語言語文化特殊研究	白井 啓介	中国近現代における表演芸術（performing arts）を言語文化の一環として考究する。1917年に始まる五四新文化運動の中では、古典文学の牢固な文語文の伝統に対抗するため、言文一致が提唱された。ところがこれは、書記言語としての革新であり、表演芸術における音声言語のあり方は未解決だった。この中で新天地を開拓した中国話劇（台詞劇）の劇本記述の構成法、表記法の特質を解明するとともに、こうした台詞構成技法が、初期の映画（無声映画）の台詞編成にどのように波及しているかを検証する。このための基盤理解として映画の中国への伝播、独自作品の生成発展についても、併せて講義する。
比較文化特殊研究	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族との間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。授業では、こうした中国大陸の諸民族を対象に、それぞれ「民族」としてのアイデンティティや文化がどのように生成し、近代以降の歴史展開のなかで、変容や再編を経てきたかについて検討し、東アジア諸民族の文化動態に関する研究を行うものとする。